周作人の日本研究における江南文化の意義

胡 令 遠　王 盈

1. 前書き

現代の中日関係に関する研究、特に中日文化に関わる研究において、周作人は特別な存在であり、歴史人物として、彼独自の多面的な認識には研究すべきところがあると思う。

周作人の日本研究は四つの時期に分けられる。第一期は1906年からの日本留学の６年間、第二期は1911年の帰国後から1939年まで、第三期は中日戦争が終わる1945年まで、その後は第四期である。いうまでもなく、この第一期は、「現地体験」と学理の二つの方面で彼がいわゆる「日本通」になることのできた基盤を築いた。第二期では、彼は1925年から北京大学における東方文学学部の創立に力を尽くした。学生の育成にはあまり実りはなかったが、一人でいろいろな科目を担当した結果、彼の日本文化研究がより系統的になった。第二期と第三期の間には過渡期がある。もともと周作人の研究は日本文化が主で、その時期、中日関係が悪化しつつあり、彼も中日両国の政治関係に目を向けるようになった。『日本管窺』シリーズはそのための「時勢文」である。対日協力者として、再び「日本店」を開いたが、時勢に合わせる「文房具」しかなかった。第四期はまた研究に戻り、日本文学の翻訳において成果を収めた。

第一期と第二期の前半期では、日本と日本文化に対して、周作人は基本的にポジティブな評価を与えた。日本軍隊の中国東北への侵略、中国での日本人浪人の暴虐、「順天時報」が日本の手先となったことなどを見て、周作人は不満を持って日本文化からその根本的原因を見つけ出すつもりだったが、要領を得ず、失敗に終わった。日本軍が北京に侵入したあと、「海軍出身」の彼は軍事上では中国が必ず負け、抵抗が無用だと判断し、日本軍政下に身を置くことにした。年をとってはじめて官僚になった周作人の日本文化の研究にはあまり言及すべきところがないのも当然のことであろう。

客観的・歴史的に見れば、第一期では、青年時代の周作人が日本で、そして日本を通して、夢中になって各種の「精神的な栄養」を取りつつあり、兄･魯迅とともに後の「五四」新文化活動のための準備をしっかりとしている。この時期、彼の日本研究には著しい特色がある。周作人はこう指摘した。「私は古今中外の各方面から多様な影響を受けてきた。分析してみたら、……知と情では西洋と日本それぞれから受けたものが多いが、意のほうは単に中国だけである」[1]。「私の雑学は外国からのものが大部分で……分析してみたら、だいたい西洋からのものは知に属し、日本からのものは情に属することが多く、私にとってどちらも有益である」[2]。

1　周作人『知堂回想録』（敦煌文芸出版社、1998年1月）、480頁。

2　同上、476頁。

ここでの「知」と「情」は周作人にとって明らかに異なっている。「知」とは言うまでもなく周作人が受けた西洋文明の影響である。周作人の経歴から見れば、彼の西洋文明に対する認識は間接的で理論的である。それに対して、日本文化に対する理解は直接的で感性的である。その原因は周作人のいうように、「日本は外国でありながら、その文化の基本は中国と同じ、だから近寄って見ても離れて見ても特に驚くべきところがない……それゆえ、日本はふるさとのように懐かしく思えるが、真のふるさとよりもっと自由自在な趣がある」[3]。つまり中日両国の特別な文化関連にあるのだ。周作人はこうも指摘した。「東京と明治時代に対して、かなりの好意があるようでその人々や物事が知りたい」[4]。「日本生活の一部分に対する愛着はたくさんの原因で形成されたのだと思う。最も重要なのは人の性分と古を思う奥ゆかしい感情のふたつであろう」[5]。

周作人の日本文化に対する認識は特別である。直接の体験と悟りの中で、「日本の生活と中国古代及び故郷の状況とをにらみ合わせてみると、逆に親しく思える」[6]。周作人にとっての「故郷の状況」は日本に渡る前に暮らしたことがある紹興と南京での日常生活であるため、（彼の日本研究は）自分の馴染んだ中国江南の日常生活と文化に密接に関わるわけである。周作人は自覚的にこのような方式で日本文化への探求の旅に出た。これは日本及び日本文化の研究に今でも意義があると言える。本論は周作人の日本文化探索における江南文化――主に紹興のいわゆる「越文化」――の役割について考察し、まとめを行う。

2. 中日文化における「自然」について

まず、周作人は日本文化には「爰好天然」つまり「自然を愛する」という特色があると認識している。これははじめて東京に来たとき、日本女性の裸足を見たときに受けた印象と連想から発したものである。晩年の回顧録に彼はこう書いた。「一人ではじめて外国に行ったら、一番面白いと思うのはそこの人々の特別な生活慣習と彼らが一般的に習得した文化生活だった……私たちが日本へ留学に行ったのはそこが維新に成功し、速やかに西洋文明を習得したからだ。でも一緒に行った人々の見方とは一致していなかった。日本の特長は外国文化を吸収するだけで、その技を盗み習い、日本のとおりにやるために留学に来たのだと思う人もいた。簡単に外国文化のまねをするのも日本の特長の一つだと思うが、必ずしも正しいとは思わない……元来の模範はまだ残っているし、模倣したものを見に来る必要は特にないと思う。日本の特別な生活慣習というものは、日本特有のものであるからこそ見に行くのである……私がはじめて日本に来た日……伏見館ではじめて出会ったのはそこの主の妹で下女の仕事をしている乾栄子であった。十五、六ぐらいの少女で客の鞄を運んだり、お茶を持ってきたりしていた。一番特別に思ったのは彼女が裸足で部屋中を行ったりきたりしていたことだ」[7]。ここで、彼は思わず中国江南水郷の婦人たちの裸足を

3　張明高、範橋編『周作人散文』第三集『日本管窺』（中国広播電視出版社）、264 ～ 265頁。

4　周作人前掲書、471頁。

5　張明高、範橋編前掲書『日本の衣食住』、273頁。

6　周作人前掲書、376頁。

7　同上、119 ～ 120頁。

詠んだ張汝南の詞「江南好」を思い出した。この詞には「江南好，大脚果如仙。衫布裙绸腰帕翠，环银钗玉鬓花偏。一溜走如烟。」[8]とある。詞の原注によると「大きな足を持っている婦人のなかで、美しきものが大脚の仙人とよばれ、その身の飾りから往来する人がその身分を知る。言わば、大脚の仙人、白玉の簪をして、米団子のような顔で道端を歩き、煙のごとし」という意味である。

これは中国江南の労働婦人だけに見られる風情だと言ってもよい。裸足で道端を歩く中国江南の婦人にしても、裸足で部屋中を行ったりきたりする日本の女性にしても、周作人の連想を引き起こしたのは当時、普通の中国の女性には見られないその「裸足」である。この後、彼は『天足』という文章を書いた。その第一文は「私が大好きなのは女性の天足だ」で、続いて「この一文に少し語弊があるとはわかっているが……頭や足で女性の容姿について品定めをするのは中国の悪い坊ちゃんたちの悪癖であり、女性を買うときどのように足を鑑賞するのかを『閑情偶寄』に書き入れたのは李笠翁のような文人たちしかいない」と解釈し、「でも確かに私は言い間違えた。私が言いたいのは纏足が大嫌い！……美に身を殉ずる纏足は野蛮なのだ」[9]と書いた。つまり、彼が言い伝えたいのは中国の女性を迫害する封建時代の因習――男性が鑑賞するための女性の纏足――に対してひどく嫌悪しているということだ。これは封建時代では、女性は男性の単なる財産と道具で、独立の人格がない、それは極めて不合理だという彼の意見にも一致している。日本の女性の社会や家庭における地位が合理的かどうかは別に検討すべきことであるが、中国文化の影響を受けながら、女性の纏足という因習は受け入れなかった。これはやはり周作人が指摘した日本文化にある「爱好天然」つまり「自然を愛する」という特色に関わりがあるように思われる。「足の本当の美を分かるのは、この世の中では、恐らく古代ギリシア人と日本人しかいない。彼らが履いているサンダルや下駄を見たらすぐ分かる。でも、彼らが気に入るのは天足、つまり天然の足である。中国人が気になるのは『文明脚』、つまり人工的に作られた粽のようないわゆる『金蓮』だけだ」[10]。

日本人の裸に対する態度からも上記のような日本文化の特色が窺える。「日本の生活にある清潔とか、いんぎんとか、洒脱とか、そのような風習も好きだ。洒脱といんぎんとは一見して少し矛盾があるようだが、実際にはそうでもない。洒脱とは乱暴無礼でなく、宗教や道学の偽善がなく、淫逸であって上品ぶることもない。これについて最も明らかな例は、日本人の裸に対する態度である」[11]。周作人はエリスの『St. Francis and Others』に書いてある見解を引用して述べた。「かつてギリシア人は裸嫌いをペルシア人やほかの夷人の特性としていた。日本人――別の時代と風土のギリシア人――も裸を回避しようとしない。西洋の夷人の観点では、淫逸は嫌いという彼らの態度を日本に伝えるまでは、そうだった。私たち中国人は、ただ足を露出することにも恥ずかしく思う」。そのゆえに周作人は次の結論を出した。「今は裸の賛美をしようとは思っていない……しかし日本の民間にある裸足の慣習はとてもいいと信じている。外出するときは下駄や草履を履くのだが、室内

8　同上、120頁。

9　張明高、範橋編前掲書第一集『天足』（中国広播電視出版社、1992年4月）、180頁。

10　同上『男子の纏足』、300頁。

11　周作人前掲書、120頁。

においては畳の上を裸足で行ったりきたりするのは極めて健康的で美的だと思う」[12]。

エリスの話を引用したのは日本文化にある「自然を愛する」特色から健康的美意識を称賛する以外に、中国の偽道学を風刺するねらいもある。女性に対する態度によって中国の偽道学の先生たちの虚偽と醜悪がさらされた。周作人は身近にみられたある実例を挙げたことがある。彼の故郷、紹興で同族の一人が毎日道徳や礼儀を口にしているが、陰で息子の嫁と通じていた。このような人でありながら、周作人の母親が纏足をやめる時、周作人に「頑固族」と呼ばれる息子と一緒に、周作人の母親が「化け物のようだ」「こうやるのは外人と結婚するためだ」（当時周作人の父親がもう亡くなっていた）「南池の大竹箒だ」（紹興で女性を罵る隠語）などと勝手な暴言を吐いて風刺ばかりしていた。周作人はこのことにはげしく刺激され、彼の偽道学への憎悪もこの点に関わっているのであろう。それゆえ、彼が無造作で自然のままの中国江南地域の労働婦人と日本女性の天足とその天足に表される活発さ、健康及び健全の美を賛美するのも当然であろう。それに、「两足白如霜，不著鸦头袜」という詞を書いた李白も、やはり中国の古代人を珍しい可愛い人だと評価した。

現実生活の中で、特に周りの人の中で周作人と最も直接的な関係を持っている女性たちが偽道学の先生たちに風刺されたことがある。上記の母親以外、周作人の妻・羽太信子も夫の故郷で若い女性たちに足のことを嘲られた。「これは民国二年の春のこと。そのとき息子はまだ一歳にもなっていなかった。妻と妻の妹と一緒に息子を抱いて裏道の咸歓川へ散歩に行った。女性の天足がまだ珍しい時代で、人々が見たらおかしいと思うのも当たり前だ。ある家の前で、少女二人が内緒話をしているうちに、すこし大きな声で『ほら、見て、尼さんが来た！』と言った」[13]。これに対して、周作人はすぐ言い返した。そして天足についてこう言った。「世の中の靴で一番美しいのは古代ギリシアのサンダルで、一番履き心地がいいのは日本の下駄で、一番経済的なのは中国南方の草履だ……隠さず、飾らず、ただ自然のままで、醜くもくだらなくもない。別に深い意味で言うのではないが、足や体のある部分は縛ったり隠したりするより自由にしたほうがいいと私は思っている。だから、中国も及ばないギリシアと日本の良風美俗は賛美しなくてはならない。残念なのはギリシアの故国を見たことがない、幸いなのは日本にいたことがあることだ。家を出るたびに、往来する人々がみんな一般人で、国内にいたらいつも見えて不快にさせる纏足をしているひとが一人もいない。ほかに収穫がないにしても、このことだけで大いに嬉しいことだ」[14]。

天足、纏足、放足及び服飾、これらはある意味では一定の文化意義を表すシンボルでもある。このとき、感覚あるいは物質としての意味を失い、一種の文化理念と美意識を表すものになった。周作人の考えをまとめると、それらを通じて中国の封権的伝統思想や文化を批判するという彼の趣旨は明らかであろう。中国文化、特に江南文化や慣習との対比により、日本文化の「自然を愛する」特色がより目立つように現れ、これは周作人の「伦理之自然化」つまり「倫理の自然化」という思想の形成にも大きな影響を与えたに違いない。

12　同上、486頁。

13　同上、121頁。

14　同上。

「天足」というのは自然にまかせるという意義で、社会の倫理関係も自然や人間の天性に任せるべきである。そうでなければ、不自然、不合理になる。中国の人々が押し付けられた「三綱五常」という伝統倫理思想には天性に反する条目があり、それらは不合理なので廃棄されるべきだと周作人は結論した。こういう論理展開は中国にも少なくないが、故郷の生活や文化を背景に日本文化の探索を通じて結論を出したのは周作人しかいなかった。

3. 中日文化における「簡素」について

「崇尚簡素」つまり「簡素さを尊ぶ」というのが日本文化のもう一つの特色だと周作人は考えている。この一点に関しては、中国の江南文化、主に紹興地域の文化を参照するのがふさわしい。周作人が日本に留学するとき、普通の日本人の生活レベルはまだ高くなかった。その簡素さを尊ぶ認識も当時の日本人の生活条件やレベルに関わっているのは明らかである。一方、「経済大国」になった現在の日本でも、長い間習得し、沈殿してきた文化として「簡素さを尊ぶ」という意識は根本的には変わっていない。当時、周作人が日本文化のこの特色を非常に評価したのは、彼の中国江南での生活とそこの文化からの影響に深く関わっているとも言えよう。たとえば、彼は和室を「簡素さを尊ぶ」意識の現われの一つだとして、その素朴さと実用性についてこう言った。「このような日本の屋敷がとても好きだ……単純な生活には特に便利だ……学生の部屋だったら、四畳半が普通だが……一部屋がたった９平方メートルで、維摩居士の部屋よりも小さいし、壁もうらさびれたようで……窓の下に小さい茶卓を一つ置いて、座布団二、三枚でちゃんと座れる。茶卓の前で書くとき、前後左右、あいているところがあったら本や紙を置くことができる。大きい机を使っているのと同じだ。お客が来たら、どこでも座れる……眠くなると、すぐ横になれてソファーなどはぜんぜんいらない。夜、押入れから布団を取り出して敷いたら正式に寝られる」[15]。ここで描写したのは彼が「下宿」する時の状況だが、一般の日本の屋敷は構造も用途もだいたいその通りである。

逆に、中国の屋敷やマンションは「大きさは一丈平方以上もあるが、ベッド、机、椅子、箱、棚などをいっぱい入れて余裕がない」、だから「狭苦しくて気が休まる趣がない」と周作人は思っている。それに、「中国の屋敷は西洋と同じ、豪壮華麗を良いこととして、粗末さをよくないとする」、だから「一軒建てられたら、まだ十分の九しか終わっていない。相当の器具や装飾がなければ工事を遂げたとは言えない。日本なら、土や木材で部屋作りが終わったら畳を引いてふすまなどをつけたらすぐ入居でき、足りないと思えるところがないどころか、明確なまばらさの趣が感じられる」[16]。彼は日本での旅行についてこう言ったことがある。「吉松や高鍋などの山村で泊まるとき、旅館の素朴な室内に座って日の出を見たり、浴衣で畳に横になってお茶を飲んだりして、前に泊まったことがある洋式または中国式の旅館より居心地がいいし、簡単でやすかった」[17]。こうしてみると、周作人が思った日本の屋敷の特長は簡素さと実用性で、もっと大切なのはこの簡素さから彼が味わった

---

15 張明高、範橋編前掲書第三集『日本の衣食住』、275頁。

16 同上、275 ～ 276頁。

17 同上、276頁。

「気が休まる趣」「まばらさの趣」という文化的趣向である。もちろん日本の屋敷には足りないところもある。たとえば夏にはふさわしいが寒さに耐えない故、冬にはふさわしくない。しかし、周作人が思い出したのは「（自分が）東南の水郷で生まれ育った人で、そこの冬が非常に寒くて室内には火気もなく、冷たい風が直接布団に吹き込む」[18]、だからいつも霜焼けに苦しんでいたこともある。それゆえ、彼は自分がそのような生活で鍛えられたことがあるため、東京の下宿生活に慣れないわけがないと言った。周作人が日本の屋敷の簡素さをよいと思う理由はその底に潜んでいる文化の神髄にある。その文化の神髄も周作人本人の風格と美意識に極めて一致しているのである。

上記と同質なのは、日本の食文化についての「簡単質素」「清淡」という周作人の認識である。彼は黄遵憲が『日本雑事詩』に書いた日本の飲食についての注釈を引用してこう述べた。「生ものと冷たいものを食べることが多い。魚が好きで取って切って食べる。火を通したものにしても、冷めたほうがすきだ。日常の茶飯では、大根や竹の子しかない。最近ヨーロッパの食べ方をまねして牛や羊も食べるようになったが」[19]。そして、自分の観察でこういう結論を出した。「普通の家庭ではだいたい朝御飯だけを作り、家族が官僚でも教員でも社員でも職人でも学生でもみなご飯を持って出かける。それは弁当と呼ばれ、箱にご飯を入れ、上には魚、あるいは塩辛い梅干を一つか二つのせる。お茶は別のものに入れる。夕方帰ったら晩御飯を作る。でも、中の下以下の家庭は朝御飯の残りを食べるのだ。冬の夜は寒くて耐えがたいので、熱いお茶を入れて食べる」[20]。それは周作人の留学時代における、普通の日本人の日常の食生活だが、一般の「中国の学生が日本に来たばかりのころは、味がとてもうすくて単調、それに油も使わない日本食を食べたらきっと驚くに違いない。特に下宿やアパートなどのところで」[21]。しかし、周作人は「それを苦しいと思うどころか、別の趣があると思った」[22]。

なぜかというと、それが、彼の紹興での少年時代の生活、つまり江南文化の体験と密接な関わりを持っているからである。「紹興では、中以下の家庭は貧乏に安じて、粗末な衣食で、年中勤労して、米以外、野菜と塩しか食べない、実に自然である……我が地元の平民たちは野菜の根が食えるのだ……確かに淡い味もしている……」[23]。彼は当時紹興の平民が夕暮の薄暗さのなかで晩御飯を食べている様子を描いたことがある。「茶碗を一つ持って、立ちながら食べることはしばしばある。茶碗の上には真っ黒で長い干した野菜を一本のせて……白菜はそのまま干して、ご飯を炊くとき、米と一緒に煮て、煮上がったら葉っぱを一枚一枚取り、直接噛んで食べる……ほかの食べ物は漬物、干したヒユ、赤色豆腐乳、臭豆腐など」。また、彼は「故郷が貧乏で、一日三食に苦労している人々が漬物や臭豆腐やニシをおかずにするしかできない。だから、塩辛さにも臭さにも苦しさはない、油はな

18　同上、273頁。

19　同上、278頁。

20　同上、279頁。

21　同上、278頁。

22　同上。

23　張明高、範橋編前掲書第一集『莧菜梗』、375 ～ 376頁。

いといけないわけでもない」[24]、だから日本で「何を食べても大丈夫だ」と言った。そして「これが故郷の何かと似ている、これは中国のあるところにも存在する、こう思い始めたら面白くなる。たとえばだしと干菜のスープ、金山寺の味噌汁と豆瓣醤、福神漬けと醤咯哒、牛蒡とアスパラ、干し魚と勒鰲、みな似ている食べ物だ。大徳寺の納豆は塩辛い豆豉で……刺身は広東の魚生で寿司は昔の魚鮓、その作り方は『斉民要術』にも書いてある。その中には交通や文化の歴史も含まれ、食べられるだけでなく思考にもいいのだ」[25]。また、自宅での宴会料理について周作人は触れている。「より豊かでありながら、うすさは変わらない。やはり野菜魚介を主として、鶏肉や豚肉も使うが、赤身の肉を使うことが多いため、あまり脂っこくはない」[26]。

日本食のもう一つの特色「冷」について、周作人は「中国人は熱いものを食べる。昔京の役人になった海軍の同級生がいる。ご飯は熱くないといけないとばかりに釜を手元に置いて、釜から茶碗へ、茶碗から口へ、素早く、まことに嵐のように食べて、それで満足できるようだった」[27]という例を挙げた。これは極端な例だが、周作人の言ったとおり「食べ物に対しては、中国人は大体冷たいのは嫌いで熱いのがすきなので、留学生たちが『弁当』を見たら頭が痛くなるのも当然だろう」[28]。しかし、周作人本人は逆に「これがとてもいい」と思った。なぜなら、彼の故郷では冷たいご飯を食べる慣習があるからだ。彼自身も十数歳の時、杭州で刑務所に入れられた祖父に仕えたころ、しばしばこういう冷たいご飯を摘み食いしたことがある。「そのときもっと苦しいのは飢饉だった……しかたなく、冷たいご飯を摘み食いした。一人で台所へ行って、ぶら下げてある竹篭から大きいご飯を取っては口にする。このうすいご飯の味に及ぶものはなく、人生で食べたことがあるものの中で、一番おいしいかったと言ってもいいだろう」[29]。

上記の引用から、周作人の見解は、日本の「質素清淡」という食文化の特色と認識が似ていて共通性もある紹興での生活や文化の背景に基づいているのがわかる。故郷と日本とは生活文化が一致していることから、彼は日本の食べ物は「食べられるだけでなく、考えさせるのだ」と思った。では、彼を考えさせたのは何であろうか。概略的に分類すれば、それは少なくとも三つあると思う。

第一に、上記にもある食べ物から発して、それによって感じられた中日文化交通の歴史である。周作人は「羊羹餅」についての文章にこう書いた。「日本へ中国の学問や技術を伝えたのは日本の留学僧であった。彼らは学術以外、食べ物をもいくつか伝えた。羊羹餅もこの僧たちが持ち帰った食べ物のひとつだった。十五、六世紀、茶道が発達したころ、これは茶請としてはやり始めた。日本文化上、『簡単』という特色がある。一つのものに専念し精進を続け、食べ物に対してもそうだ。昆布に専念する専門店があるように、羊羹餅の専門店も開くようになった。その結果、『羊羹』は大いに名を上げた……今では日本

---

24 張明高、範橋編前掲書第三集『日本の衣食住』、278頁。

25 同上。

26 同上。

27 同上、279頁。

28 同上。

29 周作人前掲書、26頁。

の茶請というと、まずは『羊羹』だ。でもその元祖が中国にあると知られていないのはただ考証ができていないためだ」[30]。また、落花生というものは中国の伝説によると、日本から伝わってきたのだが、日本では、南京豆という俗名もあり、中国の「出身」だと言われている。同じ南瓜でも、中国で「倭瓜」と言われるものが、日本では「唐茄子」と言う。

中日両国におけるこのような食文化や各生活文化上の交通の歴史が、当時、民族革命思想を強く持っていた青年周作人に、一種の歴史的誇りを自然に引き起こしたのであろう。それは彼が何回も触れた夏穂卿と銭念劬のことから窺える。周作人によると、夏穂卿と銭念劬は「東京の街を歩くとき、店の看板に書いてある文や字体を見たら、よく指さして楽しみ、今の中国にはない唐の遺風があると賛美するのだ」[31]。

また、そのとき、日本にいる中国人留学生は明治維新後、日本文化にある西洋文化の影響に注目し、中日文化の違いを強調するのが一般的であったが、周作人が逆に中日文化の歴史的な関連と交流に目を向けたことは、かなり特別である。彼は「日本で感じたのは、半分は異郷、半分は古昔である。この古昔というものが健全に異郷に生きており、幻やうそではない」[32]。

このような中日にある深い歴史文化関係に基づき、そこから進んで日本には東亜性があると結論付けた。それゆえ、中日の関係が一時的に緊張化しても、悪化しても、お互いの運命は一致しており、ヨーロッパとは違っているのだと彼は推論した。こういう意味で、周作人は唐の時代、中日に友好的で一定の功利を超えた文化上、学術上、技術上の往来関係があったことを特に評価しているのである。

第二に、「質素清淡」という日本の飲食文化の特色には高い美意識が含まれていることである。彼は谷崎潤一郎の意見を例として用いた。周作人によると、谷崎潤一郎は『東京をおもう』という文章に東京の食べ物を批判するため、フナの雀焼きと畳鰯を代表的な例とし、東京の食べ物の脆さ、貧乏さ、豊さのなさ、みすぼらしさを明らかにし、それが東京人の足りないところであり、当時の東京を中心とする文学者・美術者たちにも大きな影響を与えていると指摘した。周作人は谷崎の「言う話にはもちろん筋が通っているが」「これらの食べ物の面白さもここにある」、すなわちその「清淡質素」にあると思った。「裕福な家庭のように油や粉をたくさん使うのではなく、塩とだしを使うので、故郷の普通の民家と非常に似ており、私からみればとてもいいと思う」。周作人は紹興のあるスープを例としてあげた。これはえびの殻と食べられない竹の子の硬い部分に加えて干した野菜で煮た名もないスープで「非常にみすぼらしいながら、越人は美味く食べるのだ。そのおいしさはこのみすぼらしさ、すなわち清淡質素にある」と彼は言った。

周作人はこういう「清淡質素」を「俳味」といい、それは確かに適切な表現だと思う。飲食と日本民族の文化に最も特色がある「俳」の趣とを繋いだのは、その醍醐味を極めて正確に把握した結果ではなかろうか。ここで周作人は日本の食生活にある慣習をいくつか抽象し、総括したうえで、その美意識を掘り出した。日本の文学芸術に潜んでいる美意識も日本の国民精神のある部分もこれらにしっかり繋がっているのである。その美意識の価

30　銭理群『周作人伝』（北京十月文芸出版社、1990年9月）、562頁。

31　周作人前掲書、121頁。

32　銭理群前掲書、120頁。

値は物事の自然の姿を現すことにある。これを説明するため、周作人は故郷の食べ物に何回も触れた。「小さいころ食べた粗末な果物はやはりなつかしい。お客に出せない黄色菱の実は最低の八百屋にあるが、一番おいしいと思う。それが代表的な土産にもなるものだし……いわゆる郷土色がまだ失われていない」[33]。ここでの「おいしさ」はその「郷土色」すなわち最も本来の姿を保つことによるのである。故郷の竹の子の美味に言及するときもそうであった。紹興では、少し加工した「時大根」という食べ物は「非常に普通の食べ物で」「素朴さに真の味がある」と周作人は言った。粗末な食物にも固有の味があり、それは最高の味である。周作人は南京の「江南水師学堂」で学生時代を送った。夫子廟の得月台や下関の鎮江、揚州茶屋などの典型的な江南茶屋に、かつて彼は行ったことがある。そこの「茶請」についてこう言った。「お茶を飲むとき、あっさりしている茶請を食べる……江南の茶屋には『干糸』というものがある。乾燥した豆腐を千切りにして、千切りにしたしょうがとしょうゆを入れて、だしで煮詰め、胡麻油を上にかけてお客に出す……乾燥した豆腐の中にはもともと『茶干』という種類があり、それを千切りにしたものはお茶にはとてもふさわしい。南京にいたころ、いつもこれを食べた。あるお寺の和尚さんが作ったものは最高だといううわさもある」[34]。ここの「干糸」は素朴であっさりしているゆえ、周作人は茶請の上品だと認めた。

要するに、「清淡質素」というのは物事の本来の姿に戻ると、その本質に最も近づくということのあらわれで、人類の原始的文化の意義上、いうまでもなく、相当重要な審美価値がある。これについて、先行研究はたくさんあったが、周作人は故郷の文化と日本の研究とを結び付けて考察して彼独特の貢献をした。

第三に、周作人が故郷の「咬得菜根，則百事可做」ということわざをいつも口にしていたことである。それは「野菜の根も食えれば、何でもできる」という意味である。当時「下宿の生活は実に苦しかった。毎朝パン二枚とバターで、昼御飯と晩御飯は大根と竹の子だけ、肉は少なかった。肉にしても普通は豚肉、牛肉と鶏肉で羊肉は買うところもなく、ガチョウもアヒルもとても珍しかった」[35]。だから、「日本の生活に慣れない留学生がたくさんいる。下宿のところで椅子や机を使うのもいるし、ベッドが買えなくて押入れの上に登って寝るのもいるし、熱いご飯しか食べない人もいる。このような人はいつも私たちに笑われるのだ」。周作人の意見では、苦しみに堪えないなら留学する意味がない。特に「ただ技術を勉強するために日本に来て、結局上っ面の理解しかできない。それより、生活の上で、日本を体験したほうがいい。そうしないと、日本のことはよくわからないのだ」[36]。こういう自覚は魯迅と周作人の日本での留学生活を貫くものだった。

「野菜の根を食ったら、本当になんでもできるのか、私はよく知らない。でも、これはとても有意義だと思う。まずは貧しさが味わえる、そして苦しさも習得できるのだ」[37]。ここの「苦しさを習得する」という見解は、実は周作人が故郷・紹興の平民たちの生活方式

---

33 同上、21頁。

34 同上、84～85頁。

35 同上、117頁。

36 同上、119頁。

37 同上、25頁。

を観察して導き出したものである。それには意味がふたつあり、ひとつは「年中苦労」で、もう一つは「素朴簡単さに真の味あり」ということである。こういう生活と文化伝統は「紹興にその深い歴史的文化的源がある。魯迅は「『越鐸』出世辞」のなかで、『禹のようなたいへんの苦しさに耐えて、勤労する気質がまだ残っている』と故郷の人々をよく褒めたことがある。史書によると、禹と墨は同じ血統が受け継がれ、『禹は大聖人で、天下のために苦労していたのに、このようであり、後の墨者たちは彼に倣って、粗末な服を着て、下駄や草履を履いて昼も夜も休まず、自分を苦しめることを求めようとする』」[38]。故郷のこういう文化内包を周作人と魯迅の兄弟は日本に留学している間に不意に体験した。日本の生活と息が合ったのも当然であった。日本の生活文化の神髄と深遠さが、相互の観照から理解できたのである。

4. まとめ

上記の通り、周作人は、幼いころから青年時代まで体験してきた故郷の生活文化を背景として、日本の衣食住などの日常文化に浸かって、日本文化の姿や神髄をゆっくりと味わい、噛みしめることを通して、中国の江南文化と日本文化を比較し、体験に基づく彼自身の結論を出したのである。

指摘しなければならないのは、留学生として日本へ行った時の周作人の家族の経済状況はすでに豊かではなくなっていたため、あまり余裕のない「官費」つまり国費で兄・魯迅と暮らしていた点である。それゆえ、下宿しかできなかったのである。留学する前、紹興にいたころ、周作人はまだ周家の坊ちゃんだったが、祖父は科挙場事件で刑務所に入れられ、父親の治療にも相当な費用がかかり――これらの内容は魯迅の作品にも見られるが――、彼もその頃、毎日竹籠を持って市場へ食材を買いに行かなければならなかった。「夏用の長い服を着て、食材を運ぶ『苗かご』を持って、魚屋や八百屋に押し分けて入る」「海老120グラム、魚一切れ、野菜一本、豆腐二丁、これぐらいは私にもできる。時にはだまされたこともあったが、それにしても、買って帰って祖父に見せたら、いつものお手伝いさんより安く買ったと言われた」[39]。故郷の平民たちの家計がそれほど苦しいのを自ら見聞し、正確に認識できるようになった。こういう背景の下で、はじめて日本へ留学した周作人はその留学生活を苦しいとは思わなかった。それに、魯迅も配慮して庇護してくれた。それゆえ、彼は貧乏で苦しい留学生活になじむとともに、その中に甘味を味わう余裕も持っていたのである。つまり、彼は日本の生活文化を通して「故郷を恋しく思う」ようになり、進んでそのような結論を出すようになったのである。これについて、彼の考えは一生変わらなかった。前節でも触れたように、晩年回顧録を書いたときも彼は依然としてこのことに興味を抱いていた。この一点では、若い時と晩年の周作人はかなり一致している。言い換えれば、これは彼がかたく信じていたということである。

生活文化以外の、形而上的な日本文化の奥義についても周作人は深い興味を持った。彼は大学の講義ではなく、趣味から着手した。こういう掘り進め方はやはり彼独自のもので

38　同上、26頁。

39　周作人前掲書、46頁。

あろう。これも実は彼の故郷、更には家学と深くかかわっている。

周作人も魯迅と同じく、故郷の文化から多くの影響を受けた。幼い頃から故郷の賢人たちの著作を集めたのはそのあらわれのひとつである。魯迅は祖父の科挙場事件で外祖父のところに避難していたころにそれらの著作を集め始めたのだが、周作人の場合は杭州で刑務所にいる祖父に仕えたころである。まずは張岱の『陶庵夢憶』『於越三不朽图赞』『琅嬛文』『西湖尋夢』、そして徐渭、王思任などの本によって、「豪放」「飄逸」「深刻」という故郷の文化的な気骨や特色をめぐる考えが形成された。たとえば、「飲中八仙」の一人である唐の詩人・賀知章は洒脱な性格で、話も上手な人で、自称「四明狂客」であり、明と清の時代では「呉越遺老」たちは「放恣な者が多い」ため、「桐城派の正統文人たちにたいへん恨まれている」と周作人は何度も指摘した。実は、いわゆる「放恣」という気骨は正統経学に対する反逆であり、経学の統治地位がすでに緩んでいることも明らかにした。魯迅と周作人の時代になると、魯迅は『墳·「墳」の後に記す』に「孔孟の書物は、もっとも早くから、もっともよく読んだのだが、それはむしろ私の人生とは関係がなかったようである」[40]と書いた。周作人も『論語』『易経』など儒教の経典を学んだが、「それについての論文を書くこともできず、実はそれを読んでもよく分からなかった。特に儒教における儀礼と道徳の精義に対しては茫然と感じていた」と言った。周作人はその「豪放」「飄逸」という「越文化」の側面に対しては賛美の意を表したが、「深刻」に対しては、その中から派生した「幕友気質」以外を認めている。一方、「八大家」の古文、「宋学」および「桐城派」に対しては、機会があるごとに激しく非難したのである。故郷の文化の気骨プラス時代の変化と新旧の交替、これらを合せて考えれば青少年期の周兄弟の儒教経典に対する態度も理解できないこともない。彼らが選んだ「学問をする」方法もそこへの「道筋」も伝統と決別したものに違いない。これも周作人がいつも指摘していた兄との学問研究の道、いわゆる「横門から入る」「異端の道」である。彼の読書の選択も、人生の選択も「正統でない別の選択方法」に基づいたものである。

この「別の選択方法」は彼の先祖、特に彼の祖父に深くかかわっているのである。周作人の祖父·周福清は光緒初年の翰林学士で、江西省金渓の県知事を務めたが、上司に逆らったため、弾劾され辞めさせられた。後に金を寄付して内閣中書という官位を買って務めたが、科挙場事件で刑務所に入れられ、釈放されたあと、自宅で晩年を送った。この祖父は子孫のために書いた『恒訓』で「性格が剛直で運に恵まれない」と自評したが、実は性格の変わった人物であった。彼は官界で浮沈し、望みを実現できずに鬱々としていた。人を評価するのに厳しく、光緒帝と西太后を阿呆皇帝と暗愚な太后とさえ評価したことがある。しかし、教育については特別な意見を持っていた。「もちろんまだ時勢文の書き方を子孫に教えていたが、そのための第一歩は自由に本を読むことだと言ってまずこれを教えたのだ。特に小説を読むことを奨励し、それがもっとも人間に通じる方法で、それができたらほかに何をしても大丈夫だと彼は思った。彼がすすめたのは『西遊記』『鏡花縁』『儒林外史』などいくつかの小説だ」[41]。周作人の思い出によると、彼は杭州で祖父に仕えていたとき、「戊戌の秋、うちに帰ったら、各種類の小説を探して読む。母の台所の隅で、『緑

[40] 銭理群前掲書、40頁。

[41] 同上、53頁。

野仙踪』という小説を発見して『七剣十三侠』と一緒に読んだ。……私の読書の経験はこのように小説を読むことから始まったのだ。読書を教えてくれたのは祖父であった」[42]。周作人の話では、この後南京に５年もいて、外国語の習得以外に国文の修業もまたこの方法で行った。といっても、読む本が旧小説から新小説に変わっただけである。

もちろん、ここで言われる小説を読むという意味は趣味として読むことではなく、祖父・周福清の主な目的は、孫が物事に通じることであった。この「通じる」は人情や道理を指しており、また周作人の言った「文気近順」の意も含まれている。趣味から「通じる」を求める方法は人の天性や自然の道理にかなうに違いない。しかし、その時代ではまだ正統派の文人たちから「異端」だとされていたのであろう。

周兄弟の学問研究の方法や内容がそれまでとは「別の境界」を越えたのは、故郷の賢人たちの文化気骨の影響と時代転換前の新たな文化の兆しに加えて家庭の教育方式のおかげでもあった。杭州からはじまり、紹興を経由して南京に着いた周作人の学問の道も同様であり、東京での留学時代の日本文化研究もその延長線上にある。東京での６年間、日本の衣食住文化に対する研究は基本的には生活上の自然な体験と思考から始まった。立教大学と関係ある「三一学院」でイギリス英語を勉強したり、時々駿河台の留学生会館と法政大学の特別予科で聴講したりする以外、日本語の習得を含め、彼はすべて趣味を出発点とした。家庭で会話したり、小説や新聞を読んだり、落語や漫才を聞いたりして身に付けたのである。このような異端の方法は周作人の言った通り、「教室で厳しく訓練されなくても、社会生活が背景にあるため、容易に習えるのだろう。このように習得してきた言語は草花のようで、石竹にしても、根がある盆栽であるからこそ、花瓶に生けている大輪のダリアとは違っている」[43]。また「私は日本語の文章を読んだのは文字を通してその知識を捕まえるためではなく、日本の物事に興味を持っているから文字も吟味するようになったのだ……日本に関する雑覧は趣味を基準とするのが多く、その態度は知識を求める場合と少々異なるのも当然だ」[44]。

趣味から小説を読み始めて物事に通じることを求めるのと同じように、周作人は好奇心いっぱいで「寄席」に行き、社会に流通する言語――世の万象が見られる「落語」を見て大笑いのなかで日本の庶民文化にあるユーモアや面白さを体験した。そこに「川柳」と「狂言」にも似た、素朴健全で下品ではない「情けある滑稽」を見つけた。民間文化の滑稽の趣では、周作人は日本文学者たちが創作した俳句や俳文に目を向け、松尾芭蕉、与謝蕪村、永井荷風、谷崎潤一郎などの作品を吟味し、俳の中に含まれている禅の景趣に陶酔した。「高雅深遠なる俳の境界」というのは「飄逸滑稽で、誠実で深刻な思想や経験をも表している。芭蕉、一茶から子規までみなそうである」[45]。そして、日本を代表する芸術の一つである浮世絵に華麗な暗影がいつも伴っているのを見つけ、そこに「東洋人の悲哀」が潜んでいると解読した。夏目漱石の作品にある「徘徊の趣」もこれと同質なものだと見てよかろう。これらに基づいて、彼は日本文化の特質や中日文化の関係に関しても発見をし、う

42　周作人前掲書、73 ～ 74頁。

43　同上、476頁。

44　同上。

45　銭理群前掲書、148頁。

がった意見もたくさん提出した。

一方で、日本文化の内核にある宗教、主に新道教については、周作人はこう思った。「我々は日本国に興味を持っており、その物事を知りたい。でも、文学芸術について時間をかけて探ってみて、苦労は倍でも成果は半分だと感じた。だからこそ国民の感情や生活に着目しなければならないのだ。私としては、宗教が最も重要だと思う。すぐそこに直入できないならその前後左右に注意するべきで、民間伝承は絶好の入口だ」[46]。神を迎えるお祭りなどの習わしは紹興では長い歴史を持っている。それは故郷にいたときの周作人にとっては興味深い祝日であった。しかし、それは日本の宗教を理解するのに役立たないように思えた。周作人は「中国の民衆は感情も思想も鬼に集中しているのに反して、日本は神に集中している」と思った。彼は自分なりに努力した。柳田国男や柳宗悦などの著作を買って読んで、少しは理解したが、どう見ても隔たりがあるような感じがした。たとえば神道の儀式にあらわれている神と人の融合という状態は、外国人にとっては学習しただけで納得できるものではない。

要するに、中国の江南文化は周作人の日本文化研究にたいへん大きな役割を果たしたのだが、日本文化の核心部分に触れたとき、彼が一種の無力感に苛まれたことはたいへん大いに注目すべきなのである。

[46] 周作人前掲書、469頁。